

活動報告：ぶんぶんクラブ

1. 「ぶんぶんクラブ」のねらい

我が国における子育て支援のニーズが高まる中、これまで展開されてきた「子育て支援事業」「次世代育成事業」は新たな転換期をむかえようとしている。そこには、“地域”をキーワードとした世代間の関わりが重要視され、地域で乳幼児・児童・中高生を育てよう、次に子どもを産む世代である青年を支援していこうという動きがある。この「ぶんぶんクラブ」もこうした時代の流れにねらいを定めたものである。

「ぶんぶんクラブ」は、広島市安佐南区長束地域を中心に、そこに居住する幼児・児童と、そこに学ぶ大学生が日常的にふれあうことを目的としている。

幼児は、幼稚園の保育中および園庭開放がおこなわれる午後2時以降から夕方、児童は、学校時間外の夕方の保護者の帰宅を待つ間、大学生とふれあう時間を持つ。「ぶんぶんクラブ」のこうしたふれあい活動は、子どもたちに大学生との遊びや勉強を通じて充実した夕方の生活を提供し、大学生に子どもたちとの日常的なふれあいを通じて子ども・子育てへのリアリティの体感を提供している。また、「ぶんぶんクラブ」の活動は、地域の子どもたちと大学生がふれあうことで、学校を中心とした地域社会を開かれたものにするとともに、地域で見守る子ども・青年、様々な世代が交流する地域づくりをめざしていく。

2. これまでの活動状況

「ぶんぶんクラブ」では、スタッフ1名（教職免許を有する学園のOG）と、ボランティア学生とりわけレクリエーション・ボランティア研究会のメンバーを中心に、地域の幼稚園や児童館、公民館などとの交流活動を展開してきた。1年間の活動状況を以下に示す。

- ・児童館との交流：年間42回（宿題指導、遊び、卓球指導、一輪車指導など）
- ・幼稚園との交流：年間26回（保育補助、遊びなど）
- ・幼稚園・児童館・公民館などでの出前劇：3回（七夕やクリスマスなど）

3. ボランティア学生の変化

「ぶんぶんクラブ」の活動では、昨年度より、活動後ボランティア学生による活動記録の記述およびカンファレンスがおこなわれている。昨年度の学生の記述、およびカンファレンスでの発言内容は、4月から1年間で、「子どもの状況」→「子どもの変化や特徴」→「自分の感情」→「子どもと自分との関係性」へと変化していくものであった。今年度は4月当初から活動記録およびカンファレンスにおいて「子どもと自分との関係性」を示すのはもちろんのこと、それに加え、「関係性の中での言葉がけ」について分析的に示す様子がみられた。学生たちの記述の一部を以下に紹介する。

【学生の活動記録より】

- ・子どもがやりたいと思っていた遊びが出来ずに納得していないとき、どのように話しかければ納得できるのか、その考えが浮かばずに苦しかった。
- ・製作活動の際、子どもたちに手伝ってほしいと頼まれるものの、その子のためには、どこまで手伝うべきなのか、とても悩んだ。
- ・私と一緒に遊べなくて舌打ちした3年生に、その後どのようにフォローしたらよかったのか迷った。

これらの記述のように、学生は日常的に習慣化された交流により、子どもとの楽しいふれあいだけでなく、子どもと共にネガティブな状況を葛藤できる関係性の構築へとつとめていっていることが伺えた。以上のことから、「ぶんぶんクラブ」の活動によって、大学生は、単なる子どものかわいらしさや楽しさを知るだけでなく、よりリアリティを持った子ども・子育ての感覚を培っていくことが示唆された。

4. 今後の課題と将来構想

現在、地域の児童館や幼稚園、公民館のご協力のもと積極的な交流が行われている。学生と子どもたちとの関係性も継続的なものになりつつあり、地域の中で子どもたちと大学生がつながっていくという活動の目的を少しばかりではあるが達成していている。

ただし、様々な世代が交流する地域子育て支援

を目指すためには、今後に向けてさらなる発展的な課題が必要となるだろう。

例えば、大学・小学校・幼稚園がともに安全環境作りにつとめ、地域に対してオープンな施設となり、多世代の交流を促進していくことも大切な課題である。オープンな学校に地域の様々な世代が集っていったならば、乳幼児期に限らず児童期・思春期・青年期といった縦断的な期間で子育てを見守ることが可能となるだろう。『地域で見守る乳児から青年』を目指し、子どもの年齢に限らず常に子育てのサポートが得られる地域であったならば、そこで育った次世代の大学生は、その地域のあたたかさに魅力を感じ出産・子育てがしたいと考えていけるのかもしれない。『子育てしたい街づくり』へ、大学が子育ての魅力とリアリティを次世代に伝える役割を果たしながら、地域の中で次世代を育てる役もまた担えればと考える。

（文責：学芸学部子ども学科 若林紀乃）